

台湾台北市における歴史建築物の保存と地域活性化への活用について

中村 岳穂 小室 達章 高橋 和文
Takeho NAKAMURA Tatsuaki KOMURO Kazufumi TAKAHASHI

Note on the Preservation of Historic Spots and its Application to Local
Area Revitalization in Taipei City, Taiwan

目次

はじめに

- 1 これまでの共同研究プロジェクトの成果と問題意識
- 2 歴史建築物の保存と地域活性化への活用について：台北市の事例調査
 - 2.1 西門紅樓
 - 2.2 四四南村（眷村文化公園）
 - 2.3 青田街（日本式住宅群）
 - 2.4 台北市社区营造中心（仁安医院）
 - 2.5 糖廊文化園區
 - 2.6 考察

おわりに

はじめに

本研究は、台湾台北市において、歴史建築物を保存管理しながら、それを地域活性化に活用している取り組みについて、事例調査を通じて考察することを目的とする。台北市内には、100年以上の歴史のある古跡が点在している。これらの中には、戦後の台湾経済の急成長にともない、時代遅れとなった家屋、産業施設、工場跡地が多く存在している。近年の台北市では、都市開発の陰に埋もれ、一度は廃れてしまったようなこれらの歴史建築物を地域資源ととらえ、商業・観光目的に再利用する動きが活発になされている。本研究では、台湾において事例調査をおこない、廃れてしまった地域資源を商業・観光目的として、どのように再生し活用しているのかについて明らかにする。

また、過去の事例調査によって、現有する地域資源を有効に活用することは、商業・観光という目的だけでなく、住民参加型の地域活性化においても重要な役割を果たしていることが明らかとなっている（小室他、2010；高橋他、2011）。特に、台湾では、「社区营造」と呼ばれる住民参加型の地域活性化に高い関心が集まっている。台湾の社区营造において、廃れたしまった地域資源をどのように活用しているのかについても、事例調査をおこないながら明らかにしていきたい。

以下、これまでの研究において明らかにされたことと、本研究の問題意識を述べる。そして、歴史建築物の保存と地域活性化への活用の事例を概観し、これらの事例から導出できる含意を考察する。

1. これまでの共同研究プロジェクトの成果と問題意識

本節では、金城学院大学人文・社会科学研究所のこれまでの共同研究プロジェクトの研究成果をふまえ、本研究の問題意識を明らかにする。本研究に先行する共同研究プロジェクトとしては、2009年度実施の「名古屋市納屋橋地域における産学連携プロジェクト」、2010年度実施の「台湾台南縣の現地調査プロジェクト」、そして2011年度実施の「台湾台北市および新北市の現地調査プロジェクト」の3つがある。

2009年度実施の産学連携プロジェクトについては、小室他（2010）に詳しいが、企業、大学教員、および大学生の協働により、「ほとりす名古屋納屋橋」という商業施設（ギャラリーなどを併設できるカフェとレストラン）でのメニュー、グッズ、イベントなどの企画・運営、Webコンテンツ制作、情報発信などをおこない、地域活性化の現場体験を実際に積むことを通じて、名古屋市の納屋橋地域がどのように活性化されていくのかを調査研究した。この研究では、産学連携プロジェクトの実地体験と国内の他地域のヒアリング調査によって、地域活性化を促進して成功させる上で鍵となる2つの視点を見出すことに成功している。

第1の視点は、プロジェクトの成否が、困難な状況を解決しようと模索する中で偶発的に生まれる「意図せざる連携関係の広がり」にかかっている、というものである。具体的にいえば、2009年度の産学連携プロジェクトは、1つの大学と1つの企業という一対一の連携として始まったが、この一対一の連携だけではそれぞれの活動が十分な成果を得られない、もしくは、自らの資源を十分に活用できないという状況に直面する。そこで、この状況を解消する資源を有する主体と連携を組むことで、こうした困難な状況に対応してきたのである。

第2の視点は、プロジェクトの成否が、現有の地域資源を有効に活用できるか否かにかかっている、というものである。より具体的にいえば、新たな地域資源の創出ではな

く、現有する地域資源に何らかの工夫を加えることによってその資源の魅力を高めることが地域活性化につながる、ということである。現有する地域資源には、その地域がもつ歴史・文化・伝統、そして何よりも地域住民の愛着や思い出が包含されているものである。この愛着の気持ちを結集し、一つの目標に向かう力に変えていくことができれば、住民参加型の地域活性化を促進することができると考えられる。

上記の2点の視点を検証する調査対象として、2010年度以降の共同研究プロジェクトでは、台湾のまちづくり（「社区营造」¹）と地域活性化を調査してきた。2010年度実施の「台湾台南縣の現地調査プロジェクト」では、曲溪社區（大内郷）、總爺文化區・總爺總榮社區（麻豆鎮）、龍山社區（七股郷）、土溝社區（後壁郷）、竹門社區・詔安社區（白河鎮）、菁寮社區（後壁郷）、南紙社區（新營市）の社区营造の取り組みについてヒアリング調査をおこなった。この調査をまとめた小室他（2011）では、台南縣における住民主体・住民参加型の地域活性化の諸事例から、以下の特徴を抽出し考察をおこなっている。

- A) 社区（コミュニティ）を教育の場として活用し、社区营造（まちづくり）に学生や子どもたちを参加させること
- B) 廃棄・放置された資源に光をあてて社区营造に活用すること²
- C) 流行や時代の流れ、あるいは、社会的な関心事・問題意識の移り変わりを的確にとらえて社区营造に取り込むこと³
- D) 日本統治時代の産業施設のように、100年あまりの歴史を有するものの、本来の用途ではもはや利用できなくなった施設の新たな活用方法を開拓していること
- E) 地域住民と専門家の間で、意図せざる連携の拡大に成功していること⁴

¹ 「社区」とは「コミュニティ」を意味し、本論文における「社区营造」という言葉は、台湾で行われている住民参加型のまちづくり全般を指すものとして用いている。

² 總爺文化區・總爺總榮社區では、閉鎖された工場跡地や使われなくなった民家を、龍山社區では、廃棄される牡蠣の貝殻を、南紙社區では、廃止された鉄道施設を、上手に利用して、特別に新しい資源を作り出すことなく、有効な社区营造へとつなげている。詳しくは小室他（2011）参照のこと。

³ 土溝社區の「土溝最後一頭水牛」は台南縣で最も有名な取り組みとして知られているし、菁寮社區の「無米楽」は、ドキュメンタリー映画『無米楽』のヒットをきっかけとしているし、竹門社區・詔安社區の鐵馬駅も、自転車で台湾を一周するブームに上手に乗っているといえる。必ずしも古いものを大事にしているだけでなく、時勢に乗ることも意識している。詳しくは小室他（2011）参照のこと。

⁴ 専門家には日本人研究者も含み、日本の市民運動や住民参加型まちづくりの先例に学ぶ姿勢が見られた。

2011年度実施の「台湾台北市および新北市の現地調査プロジェクト」では、上述の台南縣における現地調査から得た知見が台湾の大都市部でも当てはまるかどうかを検証するために調査地を台北市と新北市に変えて、淡水地区の歴史建築物（小白宮・紅毛城）の教育目的での利用法、九份地区の古い街並みや金瓜石地区の金鉱採掘跡地の観光目的での利用法などについて調査研究をおこなった。

一大観光都市である台北市には、すでに国際的な知名度をもつ観光資源が数多い。そのような大都市の中にあっても、都市開発計画から切り離されてしまった地域や、時代の変化に取り残されてしまった地域が確かに存在する。あるいは、地域としては今も賑わいを見せている場所にあっても、施設や工場単位ではその役目を終えて、すでに廃れてしまったものがある。九份地区の古い街並みや金瓜石地区の金鉱採掘跡地が、その例にあたる。金瓜石地区の金山開発が活発になされたのは日本統治時代のことであり、九份地区が発達したのもその当時のことである。1971年に金鉱が閉山された後、これらの地区は丸ごと衰退してしまった。かつて栄華を極めた地域こそ、衰退後のすがたは寂しいものである。昔日の繁栄をしのばせる文物や街並みが、時間が止まったかのように残存する。さびれたすがたは、そのままでは次の時代のお荷物となってしまうが、ただ単に破壊して排除してしまうだけでは地域の文化や伝統も一緒に失われてしまう。たゆまぬ変化を要求される台北市のような大都会では、このような保存と再開発の板挟みが問題となる。

これまでの共同研究プロジェクトにおける台湾の現地調査を通じて、台湾では現有する地域資源を保存しながらそこに他の専門家との連携を広げて「新たなすがた」に上手く転換していく事例を多く見出すことができた。これらの事例で重要な役割を演じていたのが地域住民である。筆者らは、これまでの研究において、その土地を愛する住民たちが、その土地に必要とされるまちづくりを担っている事例とその特徴を明らかにしてきた。そこで浮かび上がってきたのは、「現有する地域資源の有効活用の重要性」である。

現有する地域資源には、その地域がもつ歴史・文化・伝統、そして何よりも地域住民の愛着や思い出が包含されているものである。この愛着の気持ちを結集し、一つの目標に向かう力に変えていくことができれば、住民参加型の地域活性化を促進することができると考えられる。昔から現在に至るまで、変わらぬ輝きを保っている地域資源が存在する場合、その地域資源は、まちづくりのシンボルとして有効に機能するであろう。本研究が目指すのは、そのような強い魅力や求心力をもつ地域資源ではなく、「かつては繁栄したものの時代の流れに取り残されて一度は廃れてしまったもの」や「これまで地域活性化のシンボルとしては一度も顧みられてこなかったもの」である。換言すれ

ば、地域の日常の中に埋没して特別な光をあてられていなかった資源を掘り起こして、再び（あるいは初めて）光のあたる場所に出す、という取り組みに対して本研究は焦点をあてている。

2. 歴史建築物の保存と地域活性化への活用について：台北市の事例調査

本節では、台湾台北市において、歴史建築物を保存管理しながら、それを地域活性化に活用している事例について考察する。1つ目の事例は西門紅樓である。西門紅樓は、日本統治時代に建てられた100年の歴史をもつ赤レンガの歴史建築物である。この歴史建築物が、いかにして若者の街である西門町で活用されているのかを分析する。若者の街らしく、おしゃれでセンスあふれる商品の販売、そして、若手芸術家の育成・活躍の場所として生まれ変わった西門紅樓のすがたを見てみる。

2つ目の事例は、四四南村（眷村文化公園）である。眷村とは、かつて軍関係者とその家族が生活していた居住区のことであり、都市開発の影響を受けて1999年以降は無入区となっていた。住民のいなくなった家屋は、取り壊される可能性もあったのだが、眷村の文化を後世に伝えるために保存しようという声上がり、多様な用途に利用される文化公園として生まれ変わり、今も有効に活用されている。

3つ目の事例は、青田街（日本式住宅群）である。青田街は、日本統治時代に日本人高級官僚や大学教授らが暮らした住宅地であった。時代の移り変わりとともに家主が去り、空き家となった家屋の中には老朽化がひどく目立つものも少なくない。このような現状を憂い、ある邸宅の保存と再利用を企画・運営する民間事業者が現れて世間の評判を呼び、それがこの地域に人々の注目を集める契機となったことを見てみる。

4つ目の事例は、台湾市社区营造中心（仁安医院）である。台湾市社区营造中心が置かれている建物は、仁安医院という85年ほどの歴史をもつ古跡である。大稻埕と呼ばれたかつての一大商業中心地に立地する仁安医院は、近くにある迪化街とともに「老台湾」を感じさせる風情豊かな歴史建築物である。興味深いことに、この歴史建築物は、現在台北市の社区营造センターとして利用されている。古いものを大切にしたい、という台湾の社区营造の気運と、仁安医院の活用事例について考察する。

最後に、5つ目の事例として糖廍文化園區を紹介する。ここは、かつて興隆を見せた台湾製糖業の産業遺跡であり、現在は、(i) 製糖業の歴史を伝える教育の場、(ii) 文化活動の育成・発信の場、そして (iii) 地域住民が集う憩いの場として多様な用途に活用されている。これも興味深いことに、製糖業跡地を上記の用途に利用することは、地域住民が主導して提案して行政を動かしてきた、という。商業・観光資源としてはまだ発展段階の文化園區であるが、住民主導・住民参加型の台湾の社区营造の好例として分析

をおこなう。

2.1 西門紅樓

「台湾の渋谷・原宿」と呼ばれる西門町の主役は、地元の10代の若者たちである。日本や韓国などの海外の若者文化を意識した「台北の最先端のサブカルチャー」がこの地に集積しており、雑多な店舗が、うつろい易い若者文化を反映する商品群をロー・プライスで提供している。西門紅樓⁵は、このような若者の街の中に建つ、赤レンガの歴史建築である。



写真1 西門紅樓⁶



写真2 西門紅樓の周囲の様子

西門紅樓が建てられたのは日本統治時代の1908年である。当時の西門町は、日本人の移住専門区として繁栄しており、紅樓は西門町のシンボリック存在であった。日本人の移住専門区であった西門町の主役の座は、1945年の日本の敗戦とともに、国民党政府にとって代わられる。西門紅樓は、「紅樓劇場」として大陸演芸の上演をおこない、外省人の憩いの場となったという。1963年、西洋文化の流行を受けて西門紅樓は「紅樓映画館」として開業し、モノクロ武侠映画や西洋映画などを上映し、当時の映画文化の発信地の役割を果たしていた。1980年代、台湾の都市発展の中心は同市東部の新市街地に移って行き、西門町のような旧市街地の活気は徐々に失われて行った。

西門町の転換点は、1990年代後半にあった。歴史ある旧市街地の様相をもつ西門町は、若者向けの商業エリアに一大転換をはかり、現在の西門町のすがたが徐々に形成されて行った。若者文化が集積し始めて新しい西門町のすがたが形成されて行った90年代には、歴史建築である紅樓は人々に忘れ去られたかのように放置された時期があったという。

⁵ 西門紅樓については、現地で収集した資料を参照している。

⁶ 本論文掲載写真は、すべて著者撮影のものである。

紅樓が再び脚光を浴びる契機となったのは2007年のことである。この年の11月、台北市役所文化局は、台北市文化基金会に運営管理を委託して、紅樓を西門町の文化活動のランドマークとして新たに生まれ変わらせた⁷。大胆なリノベーションが施され、紅樓は若者の街のシンボルとなり得るような「レトロ・モダンな文化発信地」に生まれ変わったのである。

現在の紅樓の内部は、以下のようになっている。八角形の建築部分の1階は「展示スペース」と「カフェスペース」、2階は「二楼劇場」と名付けられた多目的ホールである。「展示スペース」では、紅樓の100年間の歴史を伝える文物が、多くの写真と解説文とともに展示されている。紅樓がもつ歴史的・教育的資源を十分に活用し、西門町の歴史を後世に伝えていこうとする意思を強く感じることができる。「カフェスペース」は「西門紅樓茶房」と名付けられ、レトロ調の飲食スペースとギャラリーの融合が試みられている。2階の多目的ホール（二楼劇場）は、往時の雰囲気をかもし出す空間となっている。アンティーク調でまとめられた雰囲気ある空間で、映画上映、ライブ、演劇などが上演される。若者を中心として幅広い年齢層を集客しているようである。

紅樓の十字型の建築部分では、多数の小さな店舗とギャラリーが軒をつらね、そのどれもが個性的な空間を演出している。十字楼全体が、「アーティスト&デザイナーの市場」というコンセプトで空間設計がなされていて、紅樓のレトロな外観を忘れさせるような若者文化と芸術センスあふれるモダンな演出が十字楼内部に展開されている。まず十字楼の1階には、「16工房」と名付けられたショッピング・エリアがあり、16軒の小さなショップが入っている。手作りの小物やアクセサリ、オリジナルデザインのTシャツ、手書きのポストカードなど、ここでしか見つけられないような限定感あふれる商品群が目立つ。店頭立つスタッフがその場で商品の製作にはげむ様子も見られる。十字楼の2階には、「文創孵夢基地（The Cradle of Cultural Creative Dreamer）」と名付けられた空間が広がる。ここは、若手クリエイターたちの作業場、小規模なミーティング・セミナー・ワークショップの開催、そして、市民企画のイベントを開催するスペースとして活用されている。

再生した紅樓のコンセプトの一つに、「創意工夫に富むブランドを育成し、販売スペースを提供すること」がある。将来有望なアマチュア・クリエイターを発掘し、彼らの活躍の場を紅樓内に設けることによってプロのクリエイターとしてのキャリアと経験を積ませているのである。ここには、商業活動と文化活動（クリエイター育成）を両輪として紅樓を発展させていこうという明確なミッションが存在することが見てとれる。

⁷ 西門紅樓の十字型建築部分は、2000年に火事のために消失してしまった。その後、2002年に紙風車文教基金会が「紅樓劇場古跡の再生」計画を担い、紅樓は再建築されていた。

2.2 四四南村（眷村文化公園）

台北市信義区には、新しい開発エリアである信義新都心がある。世界の高級ブランド店が軒を連ねるショッピングモールや、世界的に有名な超高層ビル台北101を有するエリアとして、「新しい台北」・「未来の台北」を感じさせるエリアである。この台北101から歩いて5分ほどの距離に、「古い台北」を体験できる場所がある。それが、四四南村とよばれた、かつての眷村である。眷村とは、外省人である軍関係者が居住していた地区のことである。

1948年、中国大陸での内戦に敗れた国民政府とともに、兵士・武器工場工員とその家族が台湾に渡ってきた。彼らは、日本統治時代に日本人が用いていた家屋や倉庫を改修して、自らの居住区を形成していったのであるが、こうして誕生した最古の眷村が四四南村である。100万人を超える大陸からの移住者たちは、中国各省の出身者で構成されていた。言語も風俗もそれぞれ異なる人々が寄り集まる居住空間である眷村は、それまでの台湾の村落とは全く異なる独自の眷村文化を育んだ⁸。湖南、貴州、山東など文化の異なる地域出身者が集まったコミュニティであったが住民の連帯感は強く、人情味にあふれた場所であったという⁹。

1999年、信義新都心の都市開発によって、四四南村の住民はこの地を去ることになる。住民のいなくなった四四南村は、すべて取り壊される可能性もあったのだが、最終的には「眷村文化公園」として眷村の歴史と文化を後世に残すために保存されることになった。現在の眷村文化公園の敷地は約4、150坪あり、①往時の眷村の暮らしを伝える文物を展示する「眷村文物館」、②眷村の古民家の外観を残しながら、中身を完全に改築した商業施設「好、丘（Good Cho's）」、③毎週日曜日にバザーを開催したり、音楽会や文化講座などの各種イベントを不定期に開催したりする「屋外広場」、④芸術作品の展示を行う「文化スペース」、⑤地域の住民センターとして機能する「区民館」などを備えている。

園内を歩くと、眷村住民がかつて暮らした古民家が軒を連ねている。その数は多く、まだ改修し再活用される余地が残っている。園内の一角を改修して新たにつくられたのが、眷村文物館である。眷村住民がかつて使用していた食器や家具が展示され、当時の家庭内の様子が再現されている。眷村の現有資源である文物と建築物が、そっくりそのままの形で文化伝承と教育目的のために有効利用されている点が興味深い。これは、今回調査した他の事例とも共通する点である。

⁸ 四四南村の成り立ちについて、現地で収集した資料、および、以下のWEBサイトを参照している（「CREA WEB」、「JAL旅プラスなび」、「旅々台北.com」）。

⁹ 「旅々台北.com」を参照のこと。

眷村文化公園では、商業・観光目的に眷村の現有資源を上手く活用する工夫も見られる。上述の通り、眷村文化公園と台北101は近い距離にあり、園内の古民家越しに台北101を臨むことができる。園内から101に向かってカメラをかまえば、台北の「旧と新」のコントラストが鮮やかな面白い写真を撮ることができる。絶好の撮影スポットとしての眷村文化公園の魅力は台北市民に認知されるようになり、最近では、園内の古民家などを背景に記念撮影をする若者たちで賑わうようになっている。新都心の開発に取り残された地区であった眷村の特殊事情を逆手にとり、「都心の中のレトロ・スポット」という形で眷村を売り出してそれが成功しているのである。

さらに、観光目的でやって来た若い女性やファミリー層をうまく取り込み、リピーターに変えようとする商業上の取り組みとして、園内の商業施設「好, 丘 (Good Cho's)」の開設に注目したい。「好, 丘」の外観は眷村のレトロな様子を利用しているが、内部はリノベーションされ女性や若者の好みを反映した空間演出がなされている。小物・雑貨の販売スペースとセミオープンキッチンのカフェスペースからなり、リピーターづくりのために注力して一番の売りとなっているのがカフェで提供されるベーグルである。大きな施設ではないのだが、週末のランチタイムには、このベーグルを求めて大変に混み合うまでに話題を集めることに成功している。小物・雑貨の販売スペースでは、「好, 丘」のコンセプトである「シンプル・ライフ」を体現するものを台湾全土から厳選して選んでいる。ターゲットは、流行に敏感な若い女性である。懐かしさを感じさせつつもおしゃれな「レトロ・モダン」の小物・雑貨や、自然派に狙いを絞ったオーガニックコスメなどを揃え、若い女性への売り込みに力を入れている。



写真3 園内の古民家と台北101



写真4 園内の古民家

2.3 青田街（日本式住宅群）

青田街は、日本統治時代に日本人高級官僚の住宅地であった地域である。国立台湾師

範大学に隣接し、国立台湾大学からもさほど遠くないこの地は、文化・教育の伝統が根付く閑静な住宅街として知られている。現在の青田街には、日本統治時代に建てられた日本式家屋が33棟残っているが、空き家となり老朽化が目立つ。空き家状態で放置されていた日本式住居を改修して再活用するという動きの契機となった商業施設として、「青田七六」の事例を見てみる¹⁰。

青田七六は、足立仁¹¹台北帝国大学教授（当時）と馬廷英¹²台湾大学教授（当時）という2名の大学教授とその家族が暮らした日本式住居である。最初の家主である足立教授の私邸として建築されたのは、日本統治時代の1931年のことである。足立教授の妻みづ子は、終戦時の首相をつとめた鈴木貫太郎の次女である。上流階級であった足立夫妻が暮らしたこの住居は、当時の技術と文化を凝縮させた立派なものであったといえる。

日本の敗戦によって足立一家が台湾を去った後、この家の次の主となったのが馬教授とその家族である。馬教授は、地質学を専門とし、台湾大学地質系で教鞭をとった。実は、馬教授の存在と、青田七六の再生計画は無縁ではない。空き家となっていたかつての馬教授の住居を商業施設として生まれ変わらせた「黄金種子文化事業有限公司」という民間企業の代表は、台湾大学地質系の卒業生であり、馬教授の学問上の業績と台湾大学に対する貢献に関して、ことさら強い関心をもつ人物である。このため、商業施設として開業した青田七六においても、要所に地質学に関わるモチーフが用いられ、馬教授と台湾大学地質系の学業を来客に広めようという意図が見られる。

さて、青田七六の庭を含む総面積は206坪、木造建築部分の面積は約40坪である。建設から既に80年以上の時間が過ぎ、瓦屋根は苔むしている。この土地と家屋を管理する台北市役所に対して、上述の「黄金種子文化事業有限公司」が、住居の保護・管理と改修による商業施設の開業計画を申請したのは2010年のことである。その申請は翌年2月に認められ、「カフェ・レストラン青田七六」の開業が決まった。

青田七六の内部では、大学教授一家が暮らした当時の様子が残されており、文化的で落ち着いた空間で食事が楽しめるようになっている。古民家のレトロな風情が、貴重な観光資源にすがたを変えているのである。日本でもなかなか見られないような古い日本式住居に対する関心は、台湾ではとくに若い世代のなかで高いようである。青田七六のようなかつての私邸の場合、屋内を観覧するだけで当時の暮らしぶりを感じ取ることができる。タイムスリップ体験を感覚的に楽しみ、記念写真を沢山とって、食事やお茶で

¹⁰ 青田七六とは、かつて大学教授が暮らした私邸を改修し、それを商業・観光施設として開業する際に命名されたものであり、「青田街七巷6号」というこの場所の住所から名付けられたものである。

¹¹ 1897年生－1978年没

¹² 1899年生－1979年没

ゆっくりとくつろぐ。このような楽しみ方は、台北の若者や女性たちの間で定着しつつあるようだ。

青田七六の成功を受け、青田街の空き家の日本式住居は、その歴史文化を保存しながら、商業・観光用途への転身がはかられつつある。調査時にも、画廊にすがたを変えようとする日本式住居の改修工事に出会った。青田街の歴史建築を利用した地域活性化は、他地域との差別化をはかりながら、今後拡大していくものと考えられる。台北市政府の観光当局は、青田街と近隣の地区（永康街、龍泉街など）を合わせて、「文化と伝統」を切り口とした観光促進キャンペーンを展開している。これまでグルメや買い物で多くの観光客を台北に呼び込んできたが、今後は「台北の古い風情が残る地域」を積極的に観光客に売り込んでいくということである。



写真5 青田七六



写真6 青田七六

2.4 台北市社区营造中心（仁安医院）

仁安医院は、1927年に台湾人医師である柯謙諒によって創立された病院であり、バロック風の近代的な西洋建築として建てられたものである。歴史的価値のある建築物として台北市の古跡に指定されている。仁安医院では、創立当時の診療や手術の様子を伝える「歴史展示館」の役割と、台北市の住民参加型のまちづくりの活動拠点である「社区营造センター」の役割をあわせ持っている点が特筆に値する。

仁安医院の徒歩圏内には古い街並みを残すことで知られる迪化街という通りがある。仁安医院も迪化街も、かつて「大稻埕（ダーダオチェン）」とよばれ、清末から日本統治時代にかけて、台湾随一の商業区として栄えた地域に含まれる¹³。古跡が多いこの地域においても、仁安医院のような古い「病院」は珍しい。旧市街地の面影を残すこの地域

¹³ 往時の栄華を物語る古跡が多いため、現在この一帯は大稻埕歴史風貌特定専用区として管理されている。

の住民にとって、仁安医院は地域の歴史と伝統を表すシンボルとして大切にされている。

仁安医院内部の「歴史展示スペース」では、昔使用されていた手術台、医療器具、薬瓶、薬棚などを展示公開し、来館者に対する大稻埕の歴史教育と普及につとめている。「社区营造センター」としての活用は多様である。第1に、ここは、台北市各地の社区营造に携わる地域住民が会する情報交換の場となっている。各地でどのような社区营造の取り組みが進行しているのかが、この場所に来ると見てとれる。無農薬の家庭菜園を促進する取り組み、居住区の治安を見直す取り組み、河川の環境問題を考えるフィールドワーク・トリップの実施、児童に対する大稻埕歴史地区の社会見学ツアーの実施、そして、自転車で台北市内を巡るツアーの実施など、紹介されている社区营造には子供からお年寄りまで幅広い住民が関わっている。各地の現場で進行中の社区营造の情報を集めて、このセンターから台北市の内外に情報発信をおこなっている。この院内のホールを使用して、日本や韓国からのゲストを招いて社区营造に関する講演会やシンポジウムも開催されている。

台湾の社区营造の現場では、地域の歴史建築物を、「集客」という商業・観光目的に活用するだけでなく、地域住民の意識結集の「よりしろ」とし、さらに、地域文化継承の「教育の場」とする事例が少なくない。現在、社区营造センターとして使用されている仁安医院は、その好例であるといえる。



写真7 仁安医院の外観



写真8 仁安医院の保存・展示品

2.5 糖廍文化園區

糖廍文化園區は、台湾の製糖業に関わる産業遺跡を中心とした文化園區である。日本統治時代からの歴史をもつ倉庫などの建築物が「直轄市定古跡」に指定され保存管理されている。2010年に文化園區として新たに開館してからは、①地域住民の憩いの場、②この地の製糖業の歴史を伝える教育の場、③伝統演劇活動の促進と若手人材育成の場、

として多目的に活用されている。

「糖廨A倉」と呼ばれる巨大倉庫は、園内に現存する倉庫の中で最も古いものであり、1908年から1942年にかけて日本人によって経営された台北製糖所時代の面影を残す歴史建築物である。社区营造に関わる地域住民の話によれば、この倉庫も含む製糖業跡地一帯を取り壊して、新たに療養院を建設するのが当初の台北市の計画であった、という。地域住民は、まず反対運動を起こして、この療養院建設計画を中止させ、その後は、「製糖業跡地の保存管理、および地域活性化への活用」というこの地の社区营造の取り組みを開始したという。今では、地域住民の要望を聞きながら、台北市役所が糖廨文化園區の保存管理をおこなっている。上述の糖廨A倉は、製糖業の文化を伝える歴史展示館として現在使用されている。

「糖廨B倉」は、A倉とはまったく異なる用途に利用されており、「明華園」という劇団の稽古・リハーサルの場となっている。A倉が「製糖業文化の展示倉庫」、B倉が「文化芸術の展示倉庫」というコンセプトである。明華園は、「歌仔戲」(コアヒ)という台湾オペラの劇団であり、80年余りの歴史をもつという。上述の通り、糖廨文化園區の管理運営には地域住民の意向がよく反映されている。地域住民は、糖廨文化園區に文化的特色を加える際に、歌仔戲という伝統芸能を選び、人材育成の場として活用することを決めたのである。この点に地域の特色が現れている。

糖廨文化園區は、巨大な古い倉庫を除けば、穏やかな緑の公園であり、近所のお年寄りが集うのどかな光景が広がる。公園の一角に「五分車」と呼ばれる、さとうきびの運搬に使用された狭軌鉄道が展示されている。かつての台湾では、いたるところでさとうきび運搬鉄道が見られたというが、今では一部の地方において観光用のトロッコ列車として残っているのみである。糖廨文化園區は、お年寄りに郷愁を感じさせる場所となっている。



写真9 糖廨A倉の外観



写真10 糖廨A倉内部の展示物

2.6 考察

最初に述べた西門紅樓は、若者の街にすがたを変える西門町において、一度は忘れ去られてしまったものである。それが、近年、西門町の「主役」である若者文化と芸術活動（ひいてはそれを生み出す若手クリエイター）に門戸を開き、台北の若者文化の発信地として見事に再生を果たした。①活気を取り戻しつつある商業区であるという立地の良さ、②レトロ・モダンが好まれる台北の流行、そして③紅樓というハード面が若者文化・芸術活動というソフト面とうまく融合した点など、種々の要因がうまく合わさり、歴史建築物の商業・観光利用の成功モデルとなっている。

2番目に述べた四四南村（眷村文化公園）も、商業・観光用途で成功しつつある事例である。1999年に無人地区となり荒廃していた四四南村が、今ではタイムスリップ感覚を味わえる穴場スポットとして口コミで人気が広がっている。さびれた古民家の存在が非日常を演出し、格好の記念撮影スポットになっているため、プロのカメラマンに依頼して記念写真を撮影しに来るカップルも多い。成功の重要なカギは、この公園から見れば「外部」要因である台北101と、それを囲む信義新都心の存在にあった。台北101を囲む信義新都心は、台北市でもっとも新しい開発区の一つであり、多くの買い物客でにぎわう地域である。そのエリアで買い物をする若者にとっては、そこから歩いて10分足らずの土地に、眷村文化公園のような昔の台北の風情を残す場所が残っていることは、純粋に好奇心をかきたてられることのようなのである。信義新都心の存在は、当初は四四南村にとって取り壊しの危機をもたらしたものであったが、現在では四四南村の特徴を際立たせる重要な外部要因となっている、ということが示唆に富む事例であった。

3番目に見た青田街の事例では、空き家となり放置されてきた日本式住居が、落ち着いた雰囲気のレストランやアートギャラリーにすがたを変えつつあった。また、隣接する台湾師範大学が利用するケースも増えつつあるようだ。学生が製作したアート作品の展示等に活用されている。ただし、青田街は閑静な住宅街であり、古い日本式住居を商業・観光目的に転用する試みはまだ始まったばかりである。この地に観光客の足を運ばせるためには、レトロな空間で記念撮影を楽しむ若者層を取り込む必要がある。青田街の地域活性化は、土地の特徴を活かした合理的な試みである。この試みが、文教地区としての青田街に愛着をもつ地域住民と民間企業の主導によって開始されたことを強調しておきたい。

仁安医院と糖廊文化園區の事例では、その土地の歴史建築物に強い愛着をもつ住民が中心となって施設の運営に参加していた。その土地の歴史に対する住民の誇りは強く、住民ボランティアが訪問客に対して解説などをおこなっている。西門紅樓や四四南村のように知名度を高めたいという意図を感じるものの、商業・観光用途としては、若者に

対するアピールポイントを伸ばす試みはなされていなかった。むしろ、地域の児童に対する教育活動に積極的に活用されていた。現状では、地域の外からの訪問客を増やすことよりも、域内住民の満足度を高めるような利用法に重点が置かれている。まだ新しい社区营造の試みであるので、今後どのように展開していくのか注目したい。

おわりに

本研究では、「本来の用途ではもはや利用できなくなった、一度は廃れてしまった施設」が、商業・観光用に生まれ変わり、どのように地域活性化に貢献しているのかを調査した。近年、台北市では歴史建築物の保存・再生・転用に関する本格的な取り組みが増加しており、このことは、社区营造の取り組みが台湾全土に広がり浸透してきたことを背景としている。すなわち、歴史建築物の管理を担う行政が、その有効な活用方法に関して積極的に民間の声を集めるようになってきているのである。今回調査した事例では、官民の協力体制がとられているが、重要な決定事項に関して地域住民や民間企業が果たす役割が大きいのが特徴であった。台湾の住民主導の地域活性化運動は、規模の小さいものが多いが、それぞれの取り組みが目指す方向性が多様であり、各地区の特色がよく反映されている点が興味深い。今回の調査では、廃れてしまい放置されていた歴史建築物を再利用する、という視点は共通するものの、その利用の方向性に関して各地区の異なる特色を見出すことができた。

参考文献

- 黄世輝、宮崎 清（1996）「台湾における地域文化の再生としての「社区総体营造」の展開：地域活性化の方法に関する研究(1)」『デザイン学研究』43巻1号、pp.97-106.
- 小室達章、後藤昌人、岩崎公弥子、中田平（2010）「産学連携による地域活性化プロジェクト」、『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』、第14号、11-24.
- 小室達章、後藤昌人、高橋和文、岩崎公弥子、時岡新、中田平（2011）「台湾の社区营造における地域活性化の特質」、『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』、第15号、19-32.
- 佐藤孝秋（1997）「歴史地区の保存と再生：台北市迪化街と淡水」『建築雑誌』112巻1415号、pp.40-43.
- 高橋 和文、小室 達章、後藤 昌人、中村 岳穂、時岡 新、中田 平（2012）「台湾の大都市部と地方の中規模都市における地域活性化の特徴：教育と国際交流の視点から」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』16号、pp.33-46.
- 陳慈玉（2001）「日本統治期における台湾輸出産業の発展と変遷（上）」『立命館経済学』60巻5号、pp.659-691.
- 村田香織、渡辺 俊一（2005）「台湾におけるまちづくりの人材育成・活動支援システムの特徴及び課題：「社区营造センター」を事例として」『都市計画論文集』40巻、pp.541-546.

- 李東明、波多野純（1998）「台北市・迪化街におけるアーケード(亭仔脚)の形成と変遷」『日本建築学会関東支部研究報告集（建築歴史・意匠、計画系）』68巻、pp.541-544.
- 李東明、波多野純（2000）「アーケード付の街屋建築の成立について：台北市・迪化街における街屋建築の研究（2）」『学術講演梗概集（F-2、建築歴史・意匠）』31巻、pp.355-356.
- 李東明、波多野純（2001）「台北市迪化街におけるアーケード付き街屋建築の成立と変遷」『日本建築学会計画系論文集』547巻、pp.237-242.

参考URL

- 「CREA WEB」： <http://crea.bunshun.jp/articles/-/2195>
- 「JAL旅プラスなび」： <http://www.jal.co.jp/tabii/special/taiwan/201208/>
- 「台北ナビ」： <http://www.taipeinavi.com/food/719/>
- 「旅々台北.com」： <http://www.tabitabi-taipei.com/more/2008/0929/>
- 「好, 丘 (Good Cho's)」： <http://tw.streetvoice.com/users/goodchos/>